拍手と歓声の文化祭

平成15年11月3日、文化祭当日はあいにく雨でしたが、例年以上にたくさんの方々が来て下さいました。7階講堂では女子学生によるポップスライブや各クラスの趣向を凝らしたゲームなどが行われとても賑やか。他でもフォークソングやジャズコンサートなどがあり、いたる所で拍手と歓声が聞こえていました。模擬店は汗だくで作って下さった吉川先生ご自慢の焼きそばや、毎年恒例の竹下先生のおはぎはとても美味しかったです。また、鍼灸の体験教室では鍼灸学科の先生方のご協力を頂き、素晴らしいものになったと思います。文化祭に先駆けて10月19日に行なった岩本広明先生（鍼灸学科　第17期夜間部）の文化祭特別講演会も大盛況でした。来年は今年以上の素晴らしい文化祭を期待しています。（森ノ宮医療学園専門学校 学生会会長　三上 淑子）

20校の学生が研究を発表

東洋療法学校協会学術大会

去る平成15年10月16日（木）に、（社）東洋療法学校協会主催による第25回東洋療法学校協会学術大会（テーマ「東洋医学ー未来へのターニングポイントー」）が新大阪のメルパルクOSAKA（メルパルクホール）にて開催されました。20校の学生が研究発表を行い、本校からは鍼灸学科昼間部3年の古東恵理子さんが「鍼灸刺激による顔面および下肢の皮膚温におよぼす効果」を発表しました。また、徳島大学歯学部教授　北村清一郎先生や北里研究所部長　小曽戸洋先生の講演も行われ、本校の学生も多く参加しました。

古東恵理子さんの感想

今回、学会で自分たちが発表することが決定してから発表を終えるまでは、今までにないプレッシャーを感じていました。発表に向けての資料作成や練習は大変でしたが、やり終えた今は「発表して良かった。」という気持ちで一杯です。学会では他校の発表者と話をする機会もあり、様々な意見交換ができました。また、発表後は他の学会に参加しても今までと違う視点で見ることができ、そのような意味でも今回の発表は自分にとって貴重な経験になったと思います。最後になりましたが、本校教職員の皆様方、また今回この様な貴重な場を用意して下さった大会会長をはじめ実行委員の皆様方に厚く御礼を申し上げたいと思います。

鍼灸臨床現場から

第42回日本臨床鍼灸懇話会全国集会大阪大会

平成15年11月29日（土）・30日（日）開催されたこの大会は、日本臨床鍼灸懇話会顧問の代田文彦先生が、平成15年1月にご逝去され、その追悼の意として代田文彦先生と御尊父で日本臨床鍼灸懇話会元会長の代田文誌先生の二代にわたるご活躍を振り返り、多留淳文先生と日産厚生会玉川病院OBの先生方が講演されました。また、名古屋大学医学部教授の伴信太郎先生が「プライマリーケアにおける心のケア」と題し、患者に対する治療者側の配慮についてお話しされました。川村病院神経内科部長で日本臨床鍼灸懇話会顧問の米山榮先生の「鍼灸臨床家のための診察テクニックシリーズ4」では、実際の患者さんがモデルとなり、問診、身体診察の技術についての実技がありました。臨床討論は5題の発表があり、懇話会らしく活発な意見交換が交わされました。今回、米山先生の実技に参加し、患者さんの言葉を聞き、新たな気づきになりました。マニュアル通りの言葉かけではなく、人と人として交わり、生きた言葉で対応していくことの大切さを感じ、代田文誌先生、文彦先生が言われている臨床の中にある事実を見つめ臨床に当たっていくことの重要性を感じた大会でした。（鍼灸学科 第22期昼間部 辻丸 泰永）

我が師、田中昭三先生を偲んで

田中 昭三先生ご逝去

名誉理事
田中 昭三先生

本校創設者で名誉理事の田中昭三先生が平成15年12月15日逝去されました。享年74歳でした。田中先生は旧制大阪薬学専門学校、現在の大阪大学薬学部をご卒業後、鍼灸師となられ、山根鍼灸漢方療院を開設し多くの患者さんの治療をなさっておられました。昭和30年代から医療・医学に関する卓越した知識と見識により鍼灸界では異色の新人として注目を集め、代田文誌、米山博久先生等の臨床を学ばれました。

私が先生の門を叩いたのは昭和47年夏、その頃には朝8時から夜9時まで患者さんが絶えることなく訪れる大阪でも有数の鍼灸専門の診療所でした。そんな診療所も一朝一夕に出来上がったのでなく、最初は苦労をされたそうです。森ノ宮医療学園は大阪鍼灸専門学校として昭和48年に創設、先生も創設者のお一人であることはよくご存じのこと。学校開設前、山根鍼灸院の新人であった私は校舎用建物の掃除に行かされたことを思い出します。学校が開設されると研究科の授業にあたられ、夜遅くまで授業の準備をなさっていました。先生の授業には臨床家のみが語れる重みがありましたが、大阪鍼灸における先生の授業は学生には評判が良くありませんでした。教科書は使用されるものの、臨床家の目にはその教科書が薄っぺらなものに映るようで、事細かに注釈を加えられます。そのことに学生は混乱したようです。ところが卒業して臨床に携わると先生の言葉が解ってきた、また昭三先生の授業が聴きたいという卒業生の声が多く聴かれました。とつとつと、しかし白衣に汗をにじませながら持論を語られる先生の授業を懐かしく思い出される方も多いのではないでしょうか。

先生の功積は多々ありますが私は次の2つを挙げさせていただきます。まずは、鍼灸に診断の概念を取り入れ、臨床に生かされたこと。理学検査や、神経学的検査を取り入れられたのです。昭和30年代当時、あまりこの考え方は一般的でなく、まして臨床現場でそれを使いこなされた鍼灸師は皆無でなかったかと思います。また、後継者の育成にも努力されました。山根鍼灸院での弟子の生活は大変厳しく、臨床家として鍛えられる毎日でした。一日中、鍼灸治療を行った後、症例検討と抄読会が毎日のように開かれ、一日として息を継げる時がないのです。そんな弟子の教育と大阪鍼灸専門学校での教鞭にも力を注がれ、多くの優秀な臨床家を生み出されました。私も先生の臨床家魂を受け継いだ一人と自負しています。そんな先生も病には勝てず74歳という若さで逝去されました。当校は創設当初の180人から900人の大所帯となりましたが、初心を忘れず先生が目指された臨床家の育成に情熱を傾けることを誓い追悼の言葉といたします。

森ノ宮医療学園専門学校校長　安雲 和四郎

この時期のインフルエンザ対策

インフルエンザは　インフルエンザウイルスの感染によって起きる呼吸器を中心とした感染症です。

《症状》1～3日間ほどの潜伏期間の後に　高熱・頭痛・全身のだるさ・関節の痛みが突然現れ、咳、鼻汁などの上気道症状がこれに続き、約1週間以内に自然軽快します。

《感染経路》直接の接触と会話、くしゃみ、咳などに含まれる唾液やしぶきなどを介する飛沫感染が中心です。範囲は1m以内とされています。

《診断》キットによる迅速診断が可能です。細長い綿棒で鼻の奥をしっかりぬぐう方法で当診療所では約15分で判定が可能です。ただし、ウイルスが増殖するまでに時間が掛かることもある為、当日は陰性だが、翌日に陽性になることもあります。現在使用されている検査では、感度は90%、特異度は88～91%。

《治療》インフルエンザの治療は、「抗インフルエンザ薬の投与」と「対症療法」に分けられます。抗インフルエンザ薬は、発症後48時間以内に開始する必要があり、その場合、主要症状は1日以上短縮し、合併症や抗菌薬の投与が減少することが報告されています。対症療法としては、高熱と疼痛による苦痛と体力の消耗が大きいときに解熱剤を屯用で使用します。

《予防》流行期中は、人ごみを出来るだけ避け、外出時はマスクの着用、帰宅時は、うがいや手洗いを徹底することを心掛けましょう。日常から栄養補給をしっかりと行い、睡眠不足を避けるようにしましょう。

当診療所においてもインフルエンザの迅速診断を施行しています。また、抗インフルエザ薬の処方も出来ますので、症状のある方は、ご相談ください。抗インフルエンザ薬は、予防投与としても有効性があります。（但し処方制限あり）ご家族の方が罹患しており、感染の不安がある方は、医師に相談してください。